

平成 29 年 10 月の解説（週間天気予報）

【10 月の天候状況】

上旬は、北日本では気圧の谷や寒気の影響を受ける日が多く、3～4 日は 11 月並の寒気が流れ込んで標高の高い峠や山間部では雪が降りました。東・西日本では数日の周期で天気が変わり、6～7 日は前線を伴った低気圧が通過して、西日本や伊豆諸島で大雨になった所がありました。沖縄・奄美は高気圧に覆われて晴れた日が多く、気温が平年を大幅に上回り、特に 7 日は那覇で最高気温が 33.0 に達し、10 月として 102 年ぶりの高温となりました。

中旬は、日本の南に停滞した秋雨前線や湿った空気、寒気の影響で、全国的に曇りや雨の日が多くなりました。特に東日本太平洋側と西日本では、旬間日照時間が平年を大幅に下回りました。寒気の影響を受ける日の多かった北日本では、気温がかなり低くなりました。東日本太平洋側は、旬の後半に北東から冷たく湿った空気が流れ込みやすく、19 日は最高気温が 12 月並の低温となりました。一方、沖縄・奄美は南から暖かい空気が流れ込んだため、気温が平年を大幅に上回りました。

下旬は、北・東・西日本では数日の周期で天気が変わり、沖縄・奄美は湿った空気や台風の影響で曇りや雨の日が多くなりました。台風第 21 号と秋雨前線の影響で、21～23 日は西・東日本を中心に広い範囲で大雨や暴風となり、河川の氾濫や土砂災害などによる人的被害や高潮による被害の発生した所がありました。特に紀伊半島は記録的な大雨となり、22 日の日降水量が三重県尾鷲では 586.5mm、和歌山県新宮では 532.0mm を観測して統計開始（尾鷲は 1938 年、新宮は 1976 年）以来 10 月として最も多くなりました。台風から変わった低気圧に伴って寒気が流れ込んだため、北日本では 23～24 日に吹雪や大雪となった所があり、23 日の日降雪量が北海道の阿寒湖畔で 23cm、陸別で 14cm を観測し、統計開始（1986 年）以来 10 月としては最も多くなりました。27～29 日は台風第 22 号の影響で、沖縄・奄美～西・東日本の各地で大雨や暴風となりました。特に九州南部は記録的な大雨となり、宮崎県赤江では 28 日に日降水量 391.0mm を観測し、統計開始（2003 年）以来最も多くなりました。30 日は台風から変わった低気圧が千島近海で更に発達して日本付近は冬型の気圧配置となり、北・東日本では非常に強い風の吹いた所がありました。

月平均気温は、沖縄・奄美でかなり高かった一方、北日本では低く、東・西日本では平年並でした。月降水量は、北日本太平洋側と東・西日本でかなり多く、北日本日本海側と沖縄・奄美で多くなりました。月間日照時間は、北・東・西日本でかなり少なく、沖縄・奄美では平年並でした。

【10 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は、例年値^{（注）}より 1 ポイント高い 74%で、北海道地方と東日本、四国地方では例年を上回りましたが、それ以外の地方では例年を下回りました。最高気温の予報誤差（2～7 日目の平均）は、全国平均では例年値よりも 0.2 大きい 2.3 で、すべての地方で例年値以上の予報誤差となりました。最低気温の予報誤差（2～7 日目の平均）は、全国平均では例年値よりも 0.2 小さい 1.8 で、すべての地方で例年値以下となりました。

（注）例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12 月の週間天気予報の利用にあたって】

12 月は本格的な雪の季節の始まりとなります。北日本では雨よりも雪となる日が次第に多くなり、天気予報では降水が雪となるか雨となるかが重要なポイントとなります。

天気予報では、「雪」や「雨」という予報だけではなく、雪になる地域や時間帯の割合が大きいときは「雪か雨」、また、雨になる割合が大きいときは「雨か雪」と発表しています。こ

れにより雪の可能性がわかりますので、雪への早期の備えに週間天気予報をご活用ください。